

上通路, 3) 通し回遊魚の降下通路, および4) 遡上・降下バイパス水路の近自然デザインに区分される, 30章から構成されている。ヨーロッパ, 北アメリカでのダム・貯水池建設などによる通し回遊性魚類の個体群や群集への影響, およびそれらの弊害を回避するためにどのような遡上・降下用のバイパス水路が必要かを知るのに役立つ。研究対象の通し回遊魚はほとんどが遡河回遊魚であり, 降河回遊魚と両側回遊魚を扱った章が極めて少ないのが残念。(AG)

**カワムツの夏—ある雑魚の生態。** 一片野修. 1999. 京都大学学術出版会, 京都. 230 pp. ISBN4-87698-301-1. 2100円(税別). 本出版会からシリーズで刊行予定の生態学ライブラリーの1

冊。著者が京都大学動物生態研究室の大学院生時代に行った, コイ科の小魚カワムツの行動や個体間関係を中心とした野外での生態研究の経験と結果をベースに, カワムツの社会とはどのような総体か, またその社会をいかなる研究手法で解明してきたのかが, 本種の繁殖と摂食をめぐる個体間の関係から分かりやすく語られる。第1章の「清滝川のカワムツ」から終章(第8章)の「カワムツの社会を考える」まで, 巧みな文章運びで一気に読ませる。身の回りにいて, なわばりなどの目立った社会構造をもたない多くの動物の社会, それを野外で観察・研究することの難しさと楽しさが伝わってくる書である。既刊の「個性の生態学」(同出版会)も併せて読まれることをお勧めする。(AG)

## 会員通信・News & Comments

魚類学雑誌  
46(2): 127-128

### 国連食糧農業機構による西部大西洋の 魚類同定ガイド作成作業部会

国連食糧農業機構 (Food and Agriculture Organization of the United Nations: 略称FAO)は世界各海域の魚類を主とする海産生物の同定ガイドを作成してきた。これまでに出版された主な同定ガイドは, 西部太平洋, 西部インド洋, 西部大西洋, 東部太平洋そして南太平洋に分布する海産生物を扱ってきた。初期に出版された同定ガイドは水産重要種に重点をおいていた。このため, ハゼ類などの小型魚類や深海性魚類の属や種の説明はなく, 科の説明が手短かに述べられているだけであった。しかし, FAOは生物多様性や環境問題に配慮をするようになり, これらの魚類について比較的詳しく扱うようになってきた。実際, 1997年にマニラで開催された西部・中部太平洋の同定ガイド作成作業部会 (Workshop for Identification Guide for the Western Central Pacific)では, 水産重要種ではない魚類についても, 少なくとも属レベルの検索表を作成することが推奨された。そして, 種レベルの説明を与える例が増えてきた。

今年の7月9日から15日に中米のベリーズという大西洋に面した小国でFAOの作業部会が開かれた。今回の作業部会の目的は1978年に出版された西部大西洋の同定ガイドを大幅に改訂することであった。作業部会にはアメリカの魚類研究者が26人参加し, オーストラリアからは2人, 日本から2人(中村泉氏と私), ロシアから1人, 南アフリカから1人が参加した。また, ベリーズやカリブ海諸国から水産研究所の職員や大学院生が参加した。作業部会はKent Carpenterによって組織された。彼は,

マニラの作業部会当時はFAO職員であったが, 現在はアメリカのOld Dominion Universityの教授である。

Carpenterの部下やベリーズの水産研究者は作業部会前に現地で魚類標本を採集し, 作業部会場に集積していた。これらの標本は作業部会で使用された。FAOの作業部会は実践的な集会である。研究者は作業部会に参加する前に原稿を完成することを要求され, 事前にCarpenterに送るか, 作業部会に持参することを求められる。原稿の出来具合は, 標本とテスターと呼ばれる人たちによって試される。テスターは作業部会場に集められた標本を原稿に基づいて同定作業を行う。原稿に問題点があればテスターは原稿と校閲用紙に意見を書き込む。テスターは多くの場合, 現地の水産研究者や大学院生であるが, 今回はDave JohnsonやEd Wileyという著名な研究者もテスターとして参加していた。作業部会直前に参加を取りやめた研究者がいたため, Carpenterが彼らに参加をよびかけたのである。

原稿を改訂する作業はもう一つある。作業部会中に参加研究者は少なくとも5-6の原稿を渡され, 集中的に校閲する事を求められる。参加研究者は2班に分かれ, 一方が同定作業をテスターと一緒にいるときに他方が原稿の校閲作業を行う。したがって, 朝から夕方まで濃密な作業が続く。しかし, 作業部会前に原稿を完成していなかった研究者もいて, ノートパソコンを持ち込んで, 原稿執筆の追い込み作業をしている研究者も数人いた。この数人の研究者はマニラの作業部会のときも原稿を完成していなかった人たちで, どうやら常習犯のようである。夕食後には毎晩一人の研究者が話題提供を行った。FAO本部のPere Oliver (Carpenterの後継者)がFAOの事業について講演し, フィリピンに本部があるICLARMのRainer FroeseがFishBaseというデータベース

について、そしてWileyはカンザス大学データベース研究グループが作成したデータベースに基づいて中米・北米における動物の近未来の分布について発表した。

今回の作業部会でまとめられた原稿に関する改訂意見は、それぞれの著者に手渡されるか、参加していなかった著者には郵送された。改訂原稿提出の締切は10月末日である。Carpenterによると出版までに数年かかる見込みである。なお、西部・中部太平洋の同定ガイドは全6巻であるが、昨年1巻と2巻が出版され、今年中に3巻と4巻が出る予定で、5巻と6巻が出るのは今世紀末になるようである。

(松浦啓一 Keiichi Matsuura: 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部 e-mail: matsuura@kahaku.go.jp)

集と保存・管理に関する講義および実習のために企画された。講師はPaxtonと私が担当した。魚市場に出かけ、標本を採集し、標本を固定して同定する作業を行った。また、実験室や標本室を使用して講義も行った。Shaoによると分類学に興味をもつ学生が少なくなっているため、学生に関心をもってもらうために研修を行ったとのことであった。この企画も含め、今回のシンポジウムを見ると、若手研究者の成長を促すための配慮が随所に見受けられた。魚類学会の創立と今回のシンポジウムを契機として台湾の魚類学は今後大いに発展しそうである。

(松浦啓一 Keiichi Matsuura: 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部 e-mail: matsuura@kahaku.go.jp)

魚類学雑誌  
46(2): 128

#### 台湾で開催された魚類の系統、生態、生理に関する国際シンポジウム

今年の3月13日と14日に台北にある国立台湾大学において表記のシンポジウムが開催された。シンポジウム初日には台湾魚類学会創立集會が行われた。また、このシンポジウムは魚類学の発展に貢献した沈世傑教授の退官記念行事も兼ねていた。シンポジウムには日本(沖山宗雄氏、水戸敏氏ほか計5人)、オーストラリア(J. R. Paxton)、アメリカ(L. R. Parenti)及びカナダ(E. K. Balon)から魚類研究者が招待され、記念講演を行った。また、台湾の研究者(大学院生を含む)も多くの研究発表を行った。発表は口頭とポスターによって行われ、発表数は系統や分類に関するものが多かったが、生態や生理に関するものもあった。系統や分類に関する発表では、形態を用いた伝統的な発表がある一方で、分子データを用いたハゼ類やボラ類に関する発表も行われた。シンポジウムはK. T. ShaoとH. K. Mokによって準備され、シンポジウム当日もShaoと彼の研究室の人たちが発表会場設営や進行係として大いに活躍した。シンポジウム会場には大学院生や学部学生をはじめとして若手が多く見られた。

シンポジウム直前の3月11日と12日に学部学生のために魚類学に関する研修(ワークショップ)が行われた。この研修は魚類学の基礎に関する講義、魚類標本の採

魚類学雑誌  
46(2): 128

#### 国際動物命名規約第4版(The International Code of Zoological Nomenclature)の出版

上記の出版物は予定より一月早く今年の8月に出版された。手元に届いたものを見ると第3版(1985年)とは体裁も内容も大分変わっている。第4版は2000年1月1日から効力を発揮する。分類に関係する仕事をしている人には必携の出版物であり、他の分野の会員にも入手することをおすすめする。入手希望の人は下記に連絡すること。また、インターネット上のwww.iczn.orgには関連情報がある。

J. D. D. Smith (e-mail: jdds@nhm.ac.uk)

International Trust for Zoological Nomenclature  
c/o The Natural History Museum  
Cromwell Road, London SW7 5BD, UK

なお、第4版の和文翻訳作業が学術会議の動物学研究連絡会の中に設けられた小委員会によって進められている。私も小委員会の一員であるが、翻訳作業には時間がかかるため、和文の出版は早くても来年後半になる見込みである。

(松浦啓一 Keiichi Matsuura: 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部 e-mail: matsuura@kahaku.go.jp)